れて、わたりわづらふ、あはづにとゞまりて、去はすの二日京にいる、

〔夫木和歌抄二十六〕あはづ近江津　重之

水海のあはづにやどるきみゆゑにはかなくしほをたれてける哉

〔左經記〕寛仁四年五月廿六日丙子、上野前司定輔上道之間、於粟津邊備前前司維衡郎等之鬪亂、維衡郎等等六人之中、壹人被疵死去、六月四日甲申、參內、頭中將被詰云、右衞門尉平時通、上野守定輔之迎、於粟津射前々司維衡郎等之由有愁、仍被尋實否之間、時通進無實之由申文、

〔吾妻鏡三〕壽永三年元年○元曆正月廿日庚戌、蒲冠者範賴、源九郎義經等、爲武衞○源賴朝御使、率數萬騎入洛、是爲追罰義仲也、今日範賴自勢多參洛、義經入自宇治路、木曾以三郎先生義廣、今井四郎兼平已下軍士等、於被兩道雖防戰、皆以敗北、○中略遂於近江國粟津邊、令相模國住人石田次郎誅戮義仲、

〔源平盛衰記三十五〕粟津合戰事

甲斐源氏ニ一條次郎忠賴、板垣三郎兼信、七千餘騎ニテ先陣ニ進、粟津濱ニ打出タリ、

〔玄與日記〕慶長二年二月十四日、伊勢へ參宮申、○中略相坂を越、大津粟津を過て、みかみ山、鏡山など見て、水口といふ所に著侍りぬ、

〔東海道名所圖會一〕粟津松原

雲拂ふあらしにつれて百船も千ふねも波のあはづにぞよる　近衞關白時熙公

粟津晴嵐

嵐度粟津春興長、吹霞吹雨似相狂、山花片々一蘆波、湖上閑鷗夢也香、　相國寺林長老

義仲寺馬場村にあり、此所木曾義仲戰死の地なり、佛堂に牌あり、又家臣兼平の牌も安ず、○中略

芭蕉翁墳義仲寺境內、義仲塚に隣る、又茅室にはせを翁の木像を安ず、(中略)什寶に蕉翁の椿の杖、筆の物、かず〳〵あり、これを藏むるところを粟津文庫といふ、近年此眞蹟集、印板にして世に行ふ、